The Pacific Society

太平洋戦史研究部会報告(6)

太平洋戦史研究部会第6回セッション

われらポツダム戦争を戦えり

――オーシャン島の日本海軍――

講師　奈良　賀男（愛国学園短期大学教授）

とき　昭和六十二年五月二十一日
ところ　赤坂ホワイトハウス会議室

司会（中島洋）昨年の四月に出た太平洋学会誌の第三十号で、私が『ナウル、オーシャンの日本海軍』というのを書きまして、それをすぐ受けて、こちらにおられる西野照太郎先生が『オーシャン島の日本海軍』というのを、アルバート・エリスの著書を引いて、次の号に詳しくお書きになり、エリスの本には写真が非常にたくさんありまして、その一部をそれに載せた関係で、オーシャンにおられた戦友会の方などが非常に関心を持たれ、そういう関係から、戦時中にオーシャンに主計士官としておられた奈良先生がその後外務省に戻り、キューバ大使、コスタリカ大使などを歴任されたということもわかりまして、それできょうお話を伺うことになった次第でございます。

先程お伺いいたしましたところ、やはり奈良先生もラバウルの戦犯裁判で死刑の判決を受けて、メルボルンの書類審査で二十年になり、昭和二十八年に日本にお帰りになったということでございますから、その裁判、あるいはそのあとのご生活なども含めまして、お話をお伺いしたいと思います。

奈良先生、どうぞひとつよろしくお願いいたします。

奈良　何分昔のお話でございまして、私は昭和三十一年九月、外務省に復帰いたしまして、いまから四年ほど前に退官するまで約二十六年の間、無我夢中で公務に就いておったわけでございますが、そんなことで、昔のことをともかくできるだけ忘れて、新しい人生を歩もうというような気持でいたもんですから、頭の悪いところへもってきて、そういうような事情もありまして、昔のことはかなり記憶が薄れておりました。

オーシャン島での従軍の話を中心にして、今回、何か皆さん学会の会員に参考になるような話をして欲しいとい

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

うことでございますが、たまたま中島専務理事から、先程ご紹介がありました学会誌三十号と三十一号を送っていただきまして、そのうち中島さんの『ナウル、オーシャンの日本海軍』と、西野さんのエリスの著書を中心にしたドキュメントと申しますか、それを読ましていただきまして、おぼろげながらでも昔の記憶が戻ってきたという現状でございます。

昔はナウル、オーシャンは日本の海軍では、一つの部隊でございまして、第六十七警備隊という名称を持っておりました。ただ、なにぶんのことにナウルとオーシャンは百六十マイルほど離れておりまして、オーシャンのほうはナウルの分遣隊ということで、任命された指揮官に、ほぼ全権が任されたような形で島の防備に当たっておったわけでございます。

この六十七警備隊というのは、オーシャンからまた東のほうに二百四十マイルぐらい行ったところにタラワ、マキン島を中心にした、ギルバート諸島がございます。現在キリバス共和国という独立国になっておりますが、タラワに第三特別根拠地隊というのがございまして、六七警は三特根の配下に属していたということでございました。

ご承知のようにマキン、タラワの玉砕がありまして、そのあと北のほうのクワジェリン（クェゼリン）の第六特別根拠地隊の配下に入ることになったんですが、そのクワジェリンも昭和十九年の二月かと思いますが、玉砕いたしまして、今度はトラック島の四特根の配下に入ると、もう転々と、いわゆる上級司令部が変わったのでございます。

いずれにしましてもナウル、オーシャンは置いてきぼりをくっちゃったわけです。敵からも相手にされない、味方からも見放されたというような形で、昭和十八年の九月ぐらいからは、オーシャン島は完全に外界との接触を断たれました。十八年の十一月にはマキン、タラワに敵が来攻したわけでございますから、その直前から、敵の機動部隊による徹底的な破壊活動がございまして、それこそじゅうたん爆撃でたたかれました。

ああいうマキン、タラワのような珊瑚礁の島は、こっちの岸辺から上陸すると、どんな広いところでも向うの海が見れるというような、平たい砂地を中心とした非常に単純な地形でございました。マキン、タラワの戦闘は、敵の来攻の序幕から、逐一、柴崎司令官の電報がオーシャンでも傍受することができまして、非常に悲惨な様相を呈しました。

もう、みんなドラムカンで個別のたこつぼを掘って、敵の爆撃を回避するわけですが、敵はじゅうたん爆撃と艦砲射撃で、十八年の九月ごろに二回ぐ

オーシャン島事件の概要

オーシャン島（現地名バナバ島）は周囲わずか十キロの小島で、南緯〇度五十三分、東経百六十九度三十二分に位置する孤島である。現在はキリバス共和国に属す。かつては良質なリン鉱石の産地として知られたが、この資源は一九七九年に枯渇している。

太平洋戦争開戦の翌昭和十七年八月二十六日、駆逐艦「夕暮」は、当時、英領であったオーシャン島に陸戦隊四十六名を揚げて無血占領した。翌二十七日、駆逐艦「白露」で第六根拠地隊の陸戦隊が到着し、前日占領した陸戦隊と交替した。

さらに四日後の八月三十一日、トラック発の第四十一警備隊派遣の陸戦隊が到着し、四日前からいた陸戦隊と交替した。この第四十一警備隊派遣の陸戦隊は、九月二日、マーシャル方面防備隊に編入され、オーシャン島に軍政が実施された。

翌昭和十八年二月十五日、海軍戦時編成の改定により、第四、第六根拠地部隊からの現派遣員をもって、第六十七警備隊（司令・竹内武道大佐―兵三十八期）が新たに編成され、同日付で新編の第三特別根拠地隊に編入された上で、ナウル島に本部を置き、ナウル、オーシャン両島の防備を担当することになった。

日本海軍が占領した時点でのオーシャン島の正確な人口の記録はないが、約七百人のバナバ人、約八百人のギルバート諸島人がいたというのが通説となっている。

戦局の進展に伴い、食糧補給の困難に直面したオーシャン島では、昭和十八年前半ころから、これらの島民をタラワ、コスラエ（クサイエ）、ナウル等へ次々と移送し、終戦時に同島にいたのは百数十名のギルバート諸島人男子であった。

ところが、オーシャン島の日本軍部隊は、終戦後間もなく、反乱を企てたとして、これらの残留島民全員を殺戮し、例外的に一名だけ生き延びた島民の証言により、部隊の関連幹部が戦犯として処刑された。

この終戦後の島民殺戮を、通称、オーシャン島事件という。

なお、この事件は公刊戦史にも記録がなく、長く謎に包まれていたが、今回の奈良賀男氏の講述により、その発生の遠因を含めて事情が明らかとなった。

〔中島　洋〕

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

らい大空襲が十一月の上陸の前にはあり、日本軍の戦力は大被害を蒙ったにも拘らず本番の戦では刀おれ矢つきるまでねばり、援軍を待ったものでしたが、ついに玉砕しました。

陸奥の爆沈に遭遇

マキン、タラワその他の話は、またあとでちょっと出したいと思いますが、私が六七警に赴任を命ぜられましたのは、十八年の七月の初めでございました。私は商科大学を十八年の三月に卒業する予定であったのが、半年繰り上がりまして、十七年の九月に卒業しました。外務省に一応就職はしたんですが、本当の名目だけで、陸軍に行くか、海軍に行くかと、たまたま海軍の短現が受かりましたので、九月末日に海軍の主計見習士官になりました。私の一期前までは、海軍主計中尉にしてくれたのが、私どもから見習士官ということで、ちょっと差をつけられたわけですけれども、それで十七年の十月から翌年の一月末まで、四ケ月間、勝閧橋の袂にありました経理学校で訓練を受けたわけでございます。

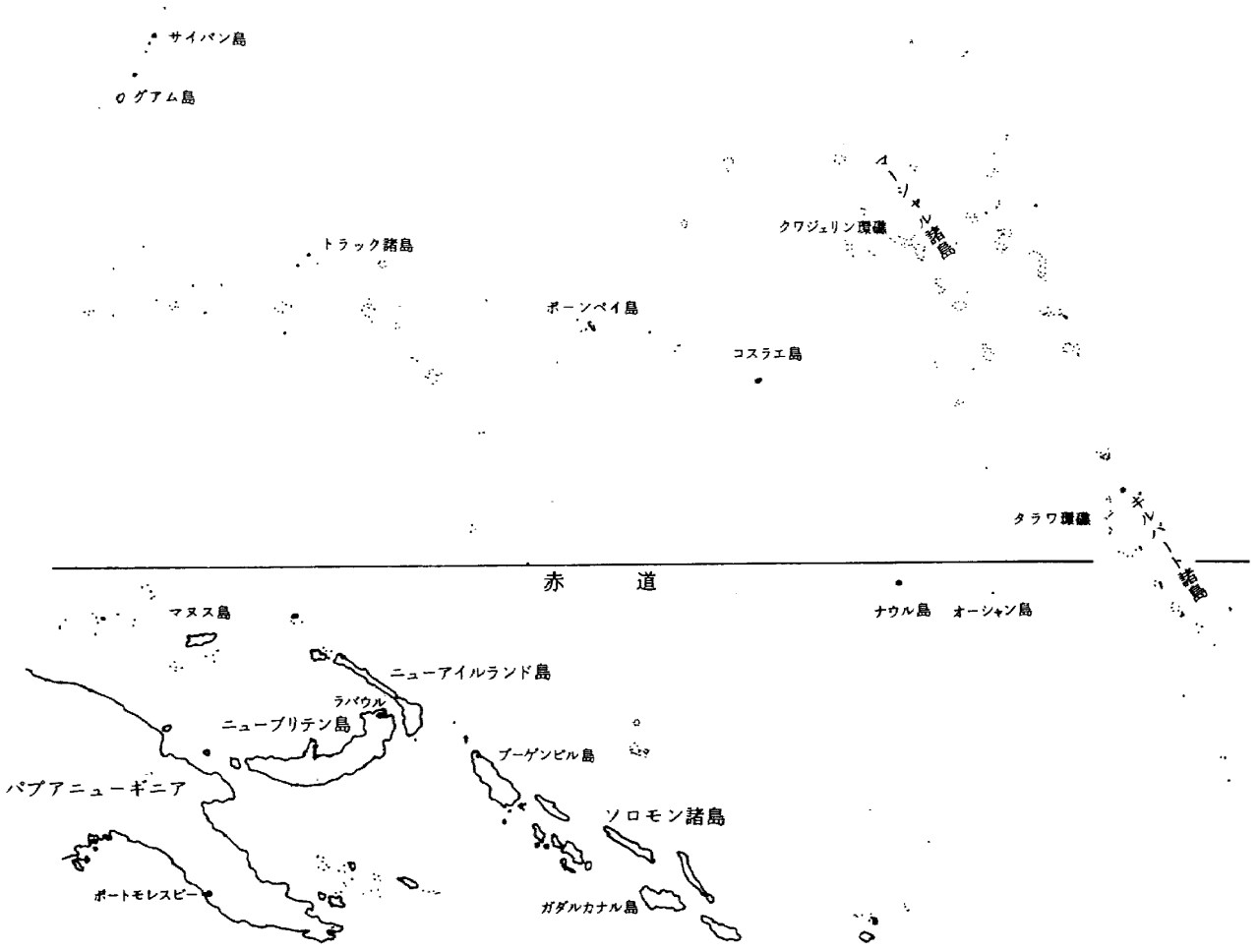
十八年一月の経理学校卒業と同時に、私は軍艦「龍田」という、これは軍艦では日本の骨董品に属する、一番古い巡洋艦でありますが、それでも前線で働いておりまして、ソロモンのほうでもって天竜、龍田という戦隊を組んで盛んに活躍しておったらしいんですが、天竜が沈み、龍田が大きく損傷しまして、ちょうど私が赴任の命令をもらった時には舞鶴に修理で来ておりまして、私は舞鶴で乗艦いたしました。

その後、龍田は第八艦隊の任務から変わりまして、舞鶴で修理が終わったところで主として瀬戸内海で新造駆逐艦、防空駆逐艦のいわゆる月クラスとか、波クラスとかいうハリネズミのような駆逐艦がどんどんできておったんですが、それの訓練部隊として十一水雷戦隊の旗艦としての任務についたわけです。

それで夏ごろまで瀬戸内海にいるうちに、たまたま米軍がアッツに上陸いたしました。これは十八年の五月。その当時の戦況は、敵はガダルを落して、そして日本軍隊が大変な消耗から立ちなおる前に、必ずどっかにくるだろうと、しかし中央突破作戦が非常に有力だと、アッツにきたのは陽動作戦だろうというような話でございました。

要するに南洋群島からフィリピン、沖縄という中央突破が、南から来る線、北から来る線よりは一番有力だ、可能性が高いというようなことをガンルームなんかで、聞いたことを覚えております。

五月にアッツに敵がきまして、そして一応連合艦隊は騒然としたわけでご



NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

ざいます。ともかく第一艦隊ですね、長門、陸奥、そのほかの一艦隊は、アッツの北方海域に出撃せよということで、急遽、五月の終わりごろから、柱島に集結を命じられまして、私の乗った艦も柱島におりましたが、六月八日に陸奥が爆沈したわけでございます。

たまたま陸奥の爆沈の近くにおった艦は、龍田と扶桑とそのほか駆逐艦が一、二隻おったと思います。陸奥の爆沈のところから一キロ以内におったのは、龍田と扶桑ぐらいで。ちょうど昼時に、飯を食おうとした時、耳に強烈な爆風を感じ、爆音は聞こえませんでした。それで海上はずーっと靄がかかっておりまして、全然視界はきかない。ただ、はるか向うの空に、大変な黒煙を上げているというようなことで、これは何かあったぞということで急行しましたら、もう陸奥が後尾をちょっと海面に出しているだけでした。

龍田と扶桑でもって急遽生存者のすくい上げをやったわけですが、両方合わせて三百数十名ぐらいで、予科練卒業直前の三百名の青年を含め千何百名も乗っとったんですけれども、救い上げたのはその程度。然も重傷者がかなりおりました。

これは軍機事件ということでどこにも上陸できない、一カ月間、海上であっちへ行ったりこっちへ行ったりしており、アッツ出撃も中止になりました。内部での話では、俺たち陸奥のこういう事件に遭遇したから、生きていることはできないぞ、みんな前線のほうに追い出されるぞと、そんなような話をしておりました（笑）。

六七警付となる

そのうち私のところに六七警付の電報が入ったわけで、調べたら敵の中央突破の矢面の配置でした。転勤ですから、徳山にちょっと入って、私だけ降ろして、船はどことなく出ていったわけですが、その龍田も、それから何カ月あとでしょうか、十一水雷戦隊の、いわゆる訓練部隊の任務から、兵員輸送の任務に変わりまして、横須賀からトラックへの普通の商船がぼんぼんやられるものですから、軍艦が兵員輸送の任務について、トラック・横須賀をピストン航行をしておる。それがあるとき八丈島沖で、真夜中に轟沈しちゃって行方不明。艦長以下誰も助かっていないという悲しい結末でした。

ですから、私も竜田から転勤することなしに乗っておったら、その運命に遭遇しただろうと思うわけでございます。

ところが、私が六七警に行ってからの運命は、極めてブライトな運命だったかというと、必ずしもそうではなかったということでありまして（笑）、まあオーシャン島というのは本当に因果な島でございまして、因果というと人の世の流れの中で何か原因があって宿命的に思いもかけない結果が出てくるというような意味です。

あそこでは敵の来攻、陸上の戦闘、殺し合いがなかったわけでございますが、多くの島民が犠牲になったこと、処刑されたということ。それからそれをきっかけに指揮官以下将校が全部戦犯となり、中隊長並びに小隊長の一部までが死刑になり、小隊長の大部分と私が有期刑になりました。

私自身は日本の軍隊の中におりまして、犯罪人なんていわれるのはもってのほかだと思うわけでございますけれども、豪軍から見ますれば、お前が犯罪人を免れるためには、日本の軍隊の中で反逆をしていたらよかったんだというような、全く価値観が違う勝者の裁きでございましたから致しかたありません。

われわれは海軍刑法、それから軍人勅諭そのほかの厳しい規制のもとで、そしてたとえ島民処刑の問題に遭遇した問題の時には私は指揮官とも意見を異にいたしました。これはもう少し先に行って詳しく述べたいと思います。意見を異にしましたけれども、指揮官と一主計士官との情報の集め方、あるいは過去を考え、将来を考えるものの見方、こういうのはやはり段違いでございました。

原住民の敵性

私は島民を生かしておいても、島民が寝返りを打って、あることないこといって部隊のかつての問題をガタガタすることはないと思うという意見で、いわゆる抵抗したわけです。しかし指揮官はそうではないと、その判断は別でございました。指揮官の鈴木直臣少佐はとてもナイスボーイな、海軍でいえば何期になるんでしょうかね、私より三つぐらい上ですから、太平洋学会誌の三十一号の、降伏調印式の真ん中に座っておられる鈴木さん、典型的な海軍士官といいますか、頭脳も明晰ですし、この方は通信関係の専門、砲術とか、そういうほうじゃなくて、通信を専門にされた、いわば現在でいう、はやりの情報将校的な生き方をして来た方で、六七警に来られる前は、ペナンの警備隊に勤務した人です。

随分ペナンでのいろんな苦労した話をしておりました。衛兵司令、警察ですね、軍隊の警察をやらされたようです。あそこは大都会ですから、衛兵司令というのは、いわゆる民間の取締りなんかも相当やらされたんだろうと思います。ペナンで日本の貨物輸送船が爆破されたり、あるいはテロ行為にあったり、そういうような事件もあった

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

らしくて、ともかく原住民とか、そういうのは敵性を持っているんで絶対に信用できないと、こういう考え方でした。

私は町で育ち、なまじっか大学時代に国際法なんかやっておったもんですから、島民なら島民をすべて敵性があるという観点からとらえるんではなしに、もう少し人道的にものを見る見方もあるんじゃないかというような考え方で、随分上司から叱られたこともございましたけれども、結局あとになってみますと、鈴木少佐のいわれたことは当たっているんです。

西野先生の紹介したエリスの本にも書いてあるように、島民の一部五十人ほどに鉄砲を持たせまして、敵が上陸してきた時に、とにかく、わずか六百名の守備隊でございますから、大砲の弾を運ぶにしても、あるいは陣地と陣地との連絡にしても、どうしても人手が欲しいということから、ある時期に島民の中の志願者に補助員的に鉄砲を持たせまして訓練したことがあるんです。

鈴木少佐は、これにあまり賛成じゃなかったんですけれども、私がかなり強引に、ただ飯食わしておくのはもったいないし、少し訓練して、補助部隊に使いましょうということで、そういうことをしたんですが、エリスの本によりますと、いざとなった時には、日本軍に向けて鉄砲を撃つつもりだったと、生き残ったのがいっておりますから、鈴木少佐が敵性をもっているから、もうひっくり返ることは間違いないという考えを示されましたのは、正しかったと思います。

ラバウルに戦犯裁判を受けるためつれてこられた時に、ラバウル地区の大部分の戦犯事件というものは、インド兵補との事件でございます。インド兵補というのは、チャンドラボースの系統で、シンガポールその他で捕虜になったインド兵が、宣誓をして、日本軍の補助部隊として大戦を戦うという人々だったんです。ラバウルにもたくさんのインド兵補がおりまして、日本軍部隊の補助的な役割をしたんですが、それが戦後みんな引っ繰り返ったわけです。

マラリヤで死んだ自分の仲間を、これはどこどこの誰が叩いて殺したんだとか、どうのこうのって、もうラバウルの事件はみんなそういう事件だったわけです。本当にぼくなんかの事件とは違って、非常にかわいそうでした。一つ叱けば三年という相場になっていました。

戦時中は食糧も少なくなりますし、仕事もきついから、日常インド兵補との、いさかいがあって、それで日本の兵隊が叩くということもあった。われわれも叩き叩かれて教育を受けたわけですから、インド兵だからといって、お客様扱いにするわけにいかないから、叩いたり、蹴ったりしたことは、当然あり得ると思います。食糧も欠乏するから、少ない分け前で、あるいは栄養失調で死んだインド兵補もいるかも知れませんが、日本兵も死んでいるわけですね。

そんなことで、一つ叩いたということが立証されると、まずラバウルの軍事裁判は三年の刑を。法廷に立った日本の兵隊は、自分も叩かれて教育されていますから、叩くことなんてなんとも思ってないわけですね。こういう理由があったから、こういう具合に叩いたんだということになります。三つ叩いたということをいさぎよくいいますと、これで原告側と話が一致するから、三つ叩いたということは十年の刑ということになります。

ところが叩かれた兵隊が、マラリヤかなんか別な原因で死んだ場合に、友達があいつは幾つか叩いた、それで殺したと、こういうふうな訴えになります。被告が「自分は殺してない。死んだのは病気のためである。しかしそのインド兵をある理由で以前、三つぐらい叩いたことがある」といいますと、それで死刑です。間違いなく死刑ですね。

そういう具合にしまして、ともかく無茶苦茶な裁判で、これはラバウルで参謀をされた方で、まだ現存している方が二、三年前に『ラバウル軍事法廷』という本を出しておりますが、みんなそういう事件でございます。まさに鈴木さんがいったと同じことがそこで行われていたわけです。

それはインド兵補が自分の身を守るためです。英米は反逆というのはきつく処罰します。ですからインド兵が、自分は意思に反して日本軍の補助をやらされたということ、それでこういう具合に捕虜としてひどく扱われたということをいわないで、自分が進んで日本軍に協力したということになりますと、今度は本国でやられてしまうわけですから、みんな引っ繰り返っているわけですね。

鈴木さんはそういうことで、いわゆる一見平和的な住民、島民でも、絶対に敵性を持っているという考えかたでした。そこから出発されておりました。私のその後の経験から見まして、その考え方が、正しかったと思います。

オーシャン島に着任

陸奥の爆沈から話が本題に入ったような感じですけれども、六七警に昭和十八年七月の初めに転勤を命ぜられまして、私が着任いたしましたのは、やはり相当交通の便が悪うございまして、トラック経由ナウルに七月の末に着任いたしました。

NII-Electronic Library Service

私はその当時主計長から、君ご苦労だけれどもオーシャンに分遣隊があって、郵便局なんかができたし、どうしても主計士官が必要なんだと。ちょっとナウルで様子を見てもらって、七月末には、あるいは八月早々にはオーシャン島に行ってもらいたいと。結構でございますという話で、約一カ月間はナウルにおりました。

ナウルはソロモンの、特にガダルの激戦があった当時から、支援部隊、飛行機を飛ばして、作戦の支援をするという意味で、飛行場を早い時期からつくっておりまして、それで部隊も非常に大規模でございました。警備隊のほかに横須賀第二特別陸戦隊、それに横須賀の建設隊というんですかな、施設部というのか、施設部のいわゆる兵隊ではございませんが、飛行場建設の軍属、これも数百名おったと思います。ですから、警備隊と、横二特と、施設隊、これで三千名を超える大部隊がおりました。それに島民その他が多数いたと思います。

ナウルに一カ月ほどいる間は、私はデング熱とアメーバ性の下痢、アメーバの赤痢じゃないんですが、アメーバ的な下痢なんですが、それに悩まされまして、ほとんどブラブラするような形で、主計長は私より二期上の慶応出身の人でした。それでなかなか人のいい、やさしい日銀の人でした。戦後、中外製薬の社長を長いことやって、最近会長になりましたかな。庶務主任は私より一期上の人、横二特のほうには私と同期のが庶務主任をやっておりまして、私はオーシャン要員ということでした。

八月になりまして、警備隊に付属しておるかつお船ですね、神州丸という、あれで何トンぐらいでしたか、百トン位の、木で作った模擬の大砲をへさきにつんだ小さな船でしたが、それに日没前に乗りまして、翌日昼頃オーシャンにつきました。昼近い時刻にオーシャンに近づきますと、ナウルに比べてはるかに小さなこぢんまりした、椰子の葉の茂る、可愛い、奇麗な島。リン鉱石が採れますから、リン鉱採掘のための幹部が住んでおっただろうと思われる赤い屋根、青い屋根の宿舎が点々としておりましてね、夢のような、これが本当の夢の島というか、宝島というか、静かないい島だなという感じを抱きながらオーシャンに上陸したわけですが、しかしこのナウルにしても、オーシャンにいたしましても、非常に生活は難しいところなんです。

水と食料の欠乏する島

昔の海底が隆起して、岩盤がポンポンと、ナウルとオーシャンとできたんでしょうか、それに何万年、何十万年か知りませんが、海鳥が糞をして、それにまた珊瑚礁が、ガリガリッとくっついて、そしていまのような姿の島になったんでしょうけれども、大体が鳥の糞が長い間の光と熱でもって岩盤化しているわけですね。鉱石化しちゃっているわけです。それに硫酸加工すれば大変な貴重な肥料にはなるんですが、リン鉱そのものは岩盤にくっつきまして、なんら植物を育ててくれないわけです。

椰子というのは非常に精の強い、砂地の海岸でも生えるし、そういう岩盤でも取りついたら、少しずつ根を張って育って行く。椰子は海岸とか、あるいは島の中央には茂っておりましたけれども、あとほとんどの有用植物は育たないといったほうがいいぐらいです。

昔から住んでおる島民が、表土を集めまして、マンゴーとかあるいはパンの木とか、そういうものを植えて、特別に育てた木が残っておりましたけれども、普通に根を張るような土質ではありませんで、土質といっても表土が十センチあればいいほうで、ほとんど表土がない。掘ったってもう岩盤だけで水は一切出ない。

しかし、貴重なリン鉱石が採れる場所ですから、昔から半世紀近く英国は会社をつくりまして、ブリティッシュ・フォスフェート・コミッションというんですか、例のエリスが勤めておったところでしょうけれども、資源の開発をしていました。ほかの南洋諸島、フィジー、ギルバートなどの南太平洋の島々はニューカレドニアを除きまして、観光あるいは水産資源はともかくとして、実際に産業のための資源というのはほとんどありませんが、ナウルとオーシャンにはあるわけで、そのために相当の投資をしたと思います。

奇麗なバンガロー風の家屋が何十軒もありましたが、必ず三十トン、四十トンのタンクを付属させておりました。要するに水がないわけです。水は天水を利用するだけなんです。

それでここは一年のうちに雨季と称する月が二、三ケ月ありますが、雨のない雨季はめずらしくなく、水は正に血の一滴でした。旱魃というのは、この島では時々ではなく、十年一日のごとく旱魃なんですね。決して誇張ではありません。一年のうち二カ月か三カ月スコールが降る月がある。そのスコールをためる。

しかし、平時でしたらば、オイルもありますから、あるいは海水から真水をつくる施設も若干ありましたし、それから、いわゆる真水を運ぶタンカーがしょっちゅうきて、それで水の供給をしておったのが、戦争になりますとそうは行かないわけで、本当に天与の水で、家に附属するドラム缶やタンクにたまった水にたよって生きる外ない

The Pacific Society

わけです。

従業員と家族を置き去りにしたBPC

そうなりますと、まず、水がなければ作物は育ちませんので、オーシャン島が孤立するということになりますと、食糧はどうするかという問題が真先に起こってくるわけです。

ナウル、オーシャンを占領したのは、戦争が始まってから八カ月ぐらいたってからなんですね。非常にゆっくりしていたわけです。十六年の十二月に戦争が始まって、ナウル、オーシャンを占領したのは、昭和十七年の八月というふうに資料には出ておりますが、谷浦部隊がオーシャン島を占領して、四十名ぐらいの陸戦隊で無血上陸したそうですけれども、谷浦さんが最初に上陸した時は、島民も大勢残されておりまして、恐慌状態にあった。要するにある程度BPC（リン鉱会社）の残した食料を少しずつ島民は食べておったようですけれども、人数も多いし、なかなか行き渡らないということで、話に聞きますと、谷浦さんが上陸した時は　もう、暴動寸前のような状態だったということでございます。

さらに悪いことには、あそこに四十人ぐらいのレプラ患者の収容所がございまして、これをどうするか、島民同士でも非常にこれをもてあまして、島民医者が一人か二人おって、僅かな医薬品でレプラ患者のテイクケアにあたっていたようですが、これは大変な、戦争が始まってから八カ月もたつのに、豪州は非人道的なことをやっていたなと私は思うんです。

あんな農耕のきかない、作物を栽培するなんていうことは、全く不可能な岩盤の小さな島に、リン鉱石の作業のためにたくさんの島民を外からも連れてくる。ネイティブスのほかに外からも連れてきておって、レプラ収容所なんかも置いて、それで自分たちだけは逃げてしまった。

なぜフィジーとかあっちのほうに、時間は十分あったのに島民を移さなかったのか。これは日本軍が占領してくれば、日本軍の大きな手枷足枷になるから、無理して連れて行く必要がないと考えればそうかも知れませんけれども、私どもからみれば、不毛の戦場に多くの人々を遺棄したことで、大変非人道的な措置ではなかったかと思うわけでございます。

オーシャン島は因果な島と申しましたが、ここに因の芽がありました。

日本軍による島民移送始まる

いずれにしましても　現実問題としてオーシャン島には昭和十七年の八月占領以後、たくさんの島民が栄養失調のような状態でずーっと暮らしておった。戦局が悪くなりますと、谷浦さんのあと、外山さんが指揮官になって来られたわけですが、四艦隊、三特根と相談いたしまして、船を回してもらって、島民をポナペとか、クサイエとかあるいはトラックとか、そういうより大きな、より農耕地のある島に移すと、さもないと、戦闘になった場合邪魔になってしょうがない上に、大体がなけなしの食糧を補給しなければならないわけですから、そういう意味でも大きな負担になる。それから水がない。

水は海からどんどんつくればいいじゃないかといいますが、もう油がないわけですから、とてもそんな、島民に水を配給するわけには行かないということで、どうしてもよその島に送ること、これが島民を生かす道だということで、外山さんの時代から非常に困難を排して実施した。何をいっているんだと、向うは中部突破作戦を真剣に考えているこの時期に、島民輸送の船をまわすなんてとんでもないというような雰囲気だったんですが、十八年の初めぐらいから、なんとか少しずつ島民を外に移住させたわけです。

一部、隣りの同じ状況のナウルに行ったということでございますが、あるいは一旦ナウルに落ち着いて、それでまたそれをどっかに便を見付けて移住させるというような、あるいは船腹の関係からそういうふうになったかもしれませんが、オーシャンからナウルに島民を、命を救うために送るというのは、全然話にならない、解決にならないことでした。

ナウル自体も島民を移住させておったわけですから、これはなにかの間違いで、船腹待ちしているうちに、とうとうそれが送れなくなったというようなことではないでしょうか。あるいは六七警付属の神州丸あたりで少しずつ、ナウルに送って、ナウルに船が来た時に、オーシャンまで、船を動かさないでナウル一本でもって、パッとどっかほかの島に送ろうとしたのかも知れません。

いずれにしても、日常の戦闘準備活動のほかに、島民については、人道ということから、随分わが部隊も六七警も骨を折ったようでございます。

先程お話したように私が十八年に神州丸で八月にオーシャンに着いた時には、まだそれでも三百名ぐらいの島民がおりました。鈴木さんは私よりちょっと遅れて八月の中頃でしたか着任したわけです。残っておる島民の中には少数の女子供もおりました。

とてもじゃないけれども、こういうものは残しておくわけには行かないということで、まだギルバートには敵が来る前でございました。ギルバートに

NII-Electronic Library Service

敵が来たのは十一月でございますから、大爆撃が始まったのは、九月になってからでございます。本当に戦況が逼迫している直前でしたけれども、ようやく小さな船を回してもらいまして、女子供と老人を乗せまして、これは北のほうのクサイ島あたりに行ったと思います。あとに残ったのが青年だけの、結局、問題になった百四十名。

鈴木さんは、もう一回この船を折り返し出してもらいたいということを、執拗に交渉しておりました。ところが戦況はものすごく切迫しておりまして、マキン、タラワのほうは二、三回の大爆撃をはさんで、毎日のように小規模の爆撃がございまして、いつ敵が上がってもおかしくないというような戦況でございまして、とうとう上のほうから、最後の百四十名の輸送の船は回せないということで、断られたわけでございます。

その時鈴木さんは、こんな邪魔者をどうするつもりだといって、地団太踏んで悔しがっておったことを私は覚えておりますが、これはどうしようもない。

最後の補給船撃沈される

そんなことをしているうちに敵は、九月になって、二回にわたる大爆撃をマキン、タラワにやったわけで、これはもう悲惨そのものでございました。

先程もお話したように、ドラムカンのたこつぼに入っておれば、たまたま直撃がなければ助かるわけですけれども、ちょっとした防空壕なんかでは崩れてしまってとてもだめです。直撃を受けたら、砂地の防空壕ですから、どうにもならない。

それで結局、夥しい死傷者が出まして、三特根は、艦隊司令部のほうに要求したと思いますが、牟呂丸いう病院船を九月に派遣してもらって、そして爆撃で傷ついた人たちを収容して、その牟呂丸がオーシャン島にもちょっと寄って行きました。オーシャン島の病気の者を収容するからということで。その時に残った島民を乗せてもらえれば一番よかったわけですけれども　そういう要求はしたようですけれども、病院船だから、初めから断られました。

一方、神州丸のほうは、マキン、タラワの大爆撃とともにオーシャン島にはそう大した爆撃はございませんでしたけれども、なんせ飛行場がナウル島にはございますから、かなりの規模の爆撃をうけ、神州丸もその時にねらわれて沈んでしまったと思います。

病院船の牟呂丸のあとに、いよいよギルバート方面の戦況が危なくなって、これから食糧の補給は全くできないということで、湊丸というのを、四艦隊が食糧を満載してナウルに降ろし、そしてオーシャン島でも降ろしてくれるように手配してくれたわけです。ところが残念なことに、われわれの肉眼でもかすかに見えるところでしたけれども、ちょうど敵の飛行機、数機に見つかっちゃいまして、われわれの目の前で爆沈されました。これは千トン余りの小型の貨物船でした。船長は大怪我して、あと七、八名の船員は助かりました。予備学生出身の坂田次郎大尉が、ダイハツに乗って救助にいきました。それで無事、ほとんど右足を切断されたような格好の船長及び船員を救助しまして、オーシャン島に戻ってきたのですが、結局、肝心な食糧は海の藻屑。それが私どもが日本の船を見た最後でございました。

そうこうしているうちに十一月になって、いわゆるマキン、タラワの戦闘が始まって、そのあとはバタバタとやられ、昭和十九年の二月にはクワジェリン、それからあとはペリリューとか、サイパン、グアム、硫黄島。遂にフィリピン、沖縄と、こういうふうに完全に敵と味方からナウル、オーシャン島は見放されたということでございます。

同期生、続々と戦死

ここでちょっと余談でございますけれども、陸奥の爆沈の時には、私の九期の同期生が三人乗っていまして、そして扶桑と私の艦で生存者の救助をしたんですが、どちらにも一人も同期生の名前が見つからず　三人とも戦死をしてしまったわけですが、タラワ島でも、私の同期生が三人おりまして、そんなことから柴崎少将の玉砕前のあの悲惨な電報は、特に胸を押さえつけられるように、またわがことのように電報を読んだんです。

クワジェリンでも、八名の同期生がおりましたけれども、これも玉砕しました。そのうちの一人に石橋君というのがおりまして　早稲田出身で、背の高い、バレーボールが非常にうまい。経理学校で四カ月間寝食をともにした際、運動なんかでなかなか目立った学生でした。この石橋君は、鳩山威一郎氏の身代わりになるような形に、結局なってしまったわけです。鳩山の後任として石橋が着任して、間もなくクワジェリンは十九年の二月に玉砕したわけですが、その鳩山威一郎氏のほうは、まだトラック島から内地に向かって、便を探している時か、あるいは漸く内地にたどり着いたぐらいでした。

これは人の話ですから、よくわかりませんが、戦後石橋湛山氏がなんかのパーティに出ていますと、鳩山一郎氏は何をおいても行って、深々と挨拶をしたというようなエピソードがあるぐらいで、実はなんの責任も一郎氏にはないわけですけれども、天命といい

The Pacific Society

ますか、自分の息子とかわって石橋が死んだということで。

ですから、私どもはわずかな教育期間で同じ海軍の主計ということで同じような運命を歩んだわけですけれども、たちまちのうちに陸奥で同期生を失い、タラワで失い、クワジェリンで失いと、こういうようなことで、ある意味で私は、こんな分遣隊の主計隊長なんかでなく、本当に華々しく陸奥みたいな大きな艦に乗ってみたいとか、あるいは特根の主計科士官で華々しく働いてみたいとかいうようなことも、若干考えないこともなかったわけですけれども、結局、変な配置にいたために、命拾いしたという結果になってしまったわけです。

しかし、これでめでたしめでたしということではなくて、その後大変なことになるわけです。

ナベタリらの脱走

さて、病気や敵の爆撃で死んだ島民もいましたが、終戦まで残った島民は割合いうことを聞き、中には悪いやつも、おかしなやつもいましたけれども、兵隊の補助員として、まあまあだったと思うんです。なにせそういう具合にして十八年の九月から十九年、二十年とほぼ二年の間完全孤立して、食糧もなくなる、水不足ではある、医療品がなくなるというようなことで、島民は表面はとにかく、内心は何を考えておったかわからない状態ではあったと思います。

その時、ナベタリという島民が六名の仲間と一緒に脱走を企てたわけです。これは、十九年半ば過ぎだったと思いますが、私も非常なショックを受けました。信頼しておった島民が、武器を持って、貴重なカヌーとともに、カヌーはなんといってもどんどん消耗しますから、あとカヌーをつくる手立てがないわけで、魚を採るための貴重な財産です。そのカヌーを三隻も持ち出して逃亡したわけです。鈴木さんは決定的にこの事件で島民に対する不信感を増幅したと思います。

エリスの本で私は初めて知ったんですけれども、ナベタリの一行はやはり、東から西への海流、赤道海流に流されて、自分たちは、ギルバート諸島のタラワに行きたかったらしいですけれども、つい流されて、とんでもないアドミラルティ諸島のほうにナベタリだけが漂着したと。あとの五人は途中でカヌーもろとも命を失ったようですけれども、そのナベタリが命からがら助かって、タラワに連れて来られて、そして驚くほど正確にオーシャン島の配備、何がどこに隠されているとか、電流鉄条網があるとか、そんなようなことを向うに内報したわけです。

ある時期からものすごく敵の爆撃が正確なんですね。今まで全然されたことのない地区で、そして掩蔽して機関銃台座があるようなところとか、こちらのやられては困るようなところを、向うが選択的に爆撃してくるという事態があったんです。これは話をつないで行きますと、やはりナベタリからの情報で、敵の目標とする焦点が従来とは違った形で決められたなということでございます。

いずれにしましても、島民全体にとりましても、この彼らの脱走は大変マイナスに、その後の経緯からみて響いて行ったと私は思います。

鈴木さんは、私には直接なじりませんでしたけれども、それみろ、とんでもないことだとの態度でした。島民は各隊に作業員として配分しておりますから、直接私の目が届くわけではないんで、ぼくに対してはそれみろ、信用できんぞといって、その程度でしたが、おそらく監督しておった中隊長並びに小隊長は、徹底的に監督不行届ということで叱られたと思います。

戦犯処罰宣伝の影響

完全孤立の状態の中で、兵隊はかぼちゃをつくる。敵の来攻は定期的に飛行機だけですから、ナウルとは事情が違っていました。オーシャンは電波探知機でもって、いわゆる触覚的な任務がありました。電波探知機が二機据えつけられまして、あの方面の、いわば不沈の鐘楼みたいなものでしたが、電気はなし、部品もなくて何の役にも立ちませんでした。飛行場はないし、大した戦略的な価値はないものですから、敵は二、三回の潜水艦による艦砲射撃の外は飛行機による小規模な爆撃程度で、兵隊はもっぱら生きるためのかぼちゃづくりに島民とともに励んだわけでございます。

昭和二十年になりまして、戦局がどんどん悪くなってきますし、食糧はなくなる、油はなくなる、硫酸はなくなると、どん底の状態になりました。硫酸がないとバッテリーが効きませんので、夜の一定時間、十五分ぐらいは発電機を回しまして、そして確か、四特根と連絡をとったと思います。こちらからの現状報告と、それから一般情勢の情報をとりました。鈴木さんは、通信出身の情報将校的な才能のある方だといいましたが、短波ラジオを聞いておりました。昭和二十年になりましてからの敵の宣伝その他を傍受しておりました。

終戦前後になりまして、例のポツダム宣言の受諾の日本政府と連合国のスイスを仲介とする交渉の進展、そんなのもいろいろ聞いておられたようです。それで時々ポンポンとわれわれに話し

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

てくれました。

その中でやはり鈴木さんに一番ショックを与えたのは、原爆の投下と戦犯の処罰の宣伝だったようです。

原爆の投下に関しましては、戦争法規の違反だ、敵がそういうことをするならわれわれもどんなことやったっていいんだ、捕虜なんか全部斬ってしまう、そういうことを条件に三回目の原爆は落とさんように日本政府は交渉すべきだということも、口走りされたし、軍人としては、あるいは当然かも知れませんけれども、大変積極的な発言でした。

それから戦犯というけれども、戦時中にいろいろあったことを、戦後、戦勝国だけが裁きだしたら、どんなことになるかわからんということで。鈴木さんの時代に大した事件はなかったわけですが、大したことはないというとちょっといいすぎですけれども、鈴木さんとしては心に残る大きな事件が一つございました。それは例のレプラ患者に安楽死をさせたんです。

マキン、タラワが落ちてからどうにも完全孤立で、医薬品もこなければ、食糧もこないということが完全にわかった時点で、健康な島民も外部に連れだせないということになりまして、この病人だけはどうしようもない。それで島民自体もレプラ患者を嫌っているわけですね、近づかないし、それではとんど気の毒な形で収容されて病室におったようですが、島民医者の意見もありまして、いわゆる青酸カリで安楽死させたわけです。これには日本の医務隊も若干関係をしているわけですが、鈴木さんはそれが頭にある

鈴木さんは、私どもには最後の島民処分の決断をするには、なんのためにということは一切いいませんでしたから、これは私の憶測ですが。

それから私の想像では、エリスの本にも書いてありますけれども、以前、電流鉄条網で島民を処刑したことがあるんですが、これはちょっと食糧を盗んだ程度のものを追い詰めて殺したというふうにエリスの本には書いてありますが、そうじゃなくて島民の間にもやはりどうにもならん強盗殺人をしょっちゅう犯すような、二人か三人の死刑囚がおりまして、それを電流網を使って死刑に処したことがあるんです。

そういうようなことがやっぱり、島民の間に広がっているわけですね。知っているわけですね。鈴木さんにいわせれば、俺の問題だけじゃないんだ、戦争中の軍の行動に関連して、そういうようなものまで住民からの告訴とかなんとか受け付けて、戦犯裁判されたら、とてもかなわんということが心の中にあったと思います。

ところが一方、鈴木さんにすれば、短波放送で徹底的に戦犯は追求する、住民だとか、捕虜の虐待は厳罰に処するというわけですから、これはその当事者にとりましては、これは本当に困ったことだ、俺自身はいいけれども、部隊のいろんな人に関係したらどうなるかということを、やっぱりトップに立つ人は考えると思いますね。ああいう制度そのものを、やるならそういうことを宣伝しないで、従来の国際法の原則でやればよかったと、あとになって考えることですけれども、脅えちゃうわけです。

島民処刑の命令下る

終戦直後の隊務会報で、島民は処刑したいとの話が鈴木さんからございまして、私が島民の関係でもありますし、これは、レプラ患者のことからきているなと頭の中で思いましたので、真先に口火を切って、島民を生かしておいても大丈夫です、やらないほうがよろしいという発言をしたわけです。万が一失敗したらどうしますかということまで私はいいました。

ほかの準士官以上の人たちは、その私の意見に対してもなんらコメントせず、鈴木さんの措置に対してもなんら意見はありませんでした。会議はほかの案件を処理して終わりまして、それから二日ほどたった晩、突如、私は呼び出されて、この通り、島民を各隊に引き渡せと、一枚の紙をもらいましてね、お前の仕事はそれで終わりと。

島民に対して食糧の問題、被服の問題がございましたので、私は主計隊の仕事のほかに、いわば島民係みたいなもの、いい言葉でいえば、民生部長みたいな仕事をしていました。すでに、各隊に配属している島民もありますし、それからその日の仕事の具合によって、島民を配分する仕事もある。これは兵隊がやっておりましたけれども、朝昼と作業に送り出す島民には、ご飯を炊いて、お結びをつくって、それで鰹の肉を煮て、干したやつに塩を入れて、それをくっつけて、それが要するに、作業の報酬なんですが、そんなような仕事を日常やっておったんです。

鈴木さんは、最終的な決断をするには、先任将校の佐久間さんといろいろ打合せをしてきたと思います。

結局、私はそれだけで終わり、あとは銃隊が命令系統で処刑を実施。だから誰がいつどこでどのような方法で処刑をするのか、一切私には知らされない形だったわけです。

裁判では、私はそういうような立場にあったといったら、私はおそらく助かったでしょう。しかし、裁判では、エリスの本にも書いてあるように、島民が蜂起したんで、事前にそれをキャッチして捕捉殲滅したと。いわゆる島民が暴動を起こそうとしたのを事前に

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

キャッチして捕捉殲滅したという方針で行きたいと鈴木さん、これまた頑張るわけです。その前にも一人生き残っているということはわかっているわけですが。

鈴木少佐、指揮官、それは駄目です、一人生き残っているんですから、鈴木さん腹を決めて、自分の判断のよって来たるところを述べ、絶対命令を下すことによって、この事件は起きたんだ、中隊長以下は何ら責任がないんだ、裁判所でいってくれませんかと、ぼくはやぶれかぶれだったですからね、収容されている場所であるラバウルの収容所でもって、裁判の打合せの時に、鈴木さんに意見具申したことがあるんです。

しかし鈴木さんは、それじゃ通らん、通らんばかりじゃなしに、戦時中の海軍の作戦行動に関連して島民処刑を決断するに至っているし、確たる理由がなければ、やはり海軍の名誉にかかわるという。これじゃ、誰もとても反対できませんわね。

ポツダム戦争

私もそうだと思います、あとで申し上げますけれども、戦犯裁判というのは、無茶苦茶なものの考え方、増悪と復讐の怨念で来ていますからね。だからやはり一つの戦争なんですね、ポツダム戦争なんですね。実際の戦闘はポツダム宣言受諾で終わったわけですけれども、そのあと、日本国全体は独立・主権を失って厳しい占領下に置かれる。軍事占領。それから外地にある市民や兵隊は、明日の命がわからんような生活を送る。おびただしい犠牲者が出ました。戦争裁判では向うの価値判断だけを押しつけて、極刑を連発する。これは一種の戦闘だと思うんです。

日本人は皆いやおうなしに、また全くの受身の形でポツダム戦争に投げ込まれたと思います。そして願いは唯一つ、国の主権回復。その日まで耐えがたきを耐え忍びがたきを忍ぶ。戦後、いわゆる文化人が抽象的に純粋思考でもって、確かにそういう思考の仕方はあるかも知れんですけれども、たとえば、勝てば官軍、負ければ賊軍ですね。連合軍は神、日本軍は悪の権化のようなざんげの論評を横行させました。しかし、実際の生きた姿はとてもそうじゃない。

ということはわれわれの部隊に関しても、われわれが戦争中にやった以上のことを豪州はわれわれに対してやりましたから。中島さんのリポートにも書いてありますが、ソロモンに豪州軍の管轄のもとに収容されたナウル、オーシャンの兵隊がなぜ三割も四割も死ななきゃならなかったか。

これは向うのマラリア政策によって起こりました。マラリアの薬を取り上げて、自分たちの管轄に置かれた以上は、一切食糧は持ってはいかんと、あるいは医薬品はちゃんと給与するからと、全部取り上げたあと、今度はああいうマラリア、世界でも有数の悪性マラリア地域にほうり込んで、そして薬を与えない政策。これじゃ、どんなに丈夫な人でも死んでしまいますよ。

この政策を日本の司令や羽柴連絡員が悪かったからとかなんとか解釈する人がいますが、そうじゃなくて、これは司令なりなんなりにしたって、みんなマラリアにかかった捕虜の身分で、悪いのは管理する側であったと私は思います。ただ、司令は内地に帰って報告すべきだったと思います。幾百名の部下が、戦が終ってから死んだんですから。

もっとも、厳しい軍事占領が始まったばかりの日本で、連合軍の残虐に関するリポートをする勇気がなかったのかも知れませんし、また日本政府も聞く耳を持たなかったのかも知れません。戦勝者は他方、正義・人道をかかげて戦争裁判を行いましたが、やはりぼくは平和条約ができるまで、これはポツダム戦争の一つの場面であったというふうに思うわけです。

鈴木さんが海軍の名誉のためにというのは、もう時代錯誤じゃないかというふうに、いまの感じでは受けますけれども、その当時はやはりその言葉が通ずるんです。

そういうことで裁判では意思を統一しましたから、私の立場は、いわゆる銃隊と違った立場ですけれども、それと違った話をするわけには行かないわけですから、反対したんだ、こういったんだなんていうことを法廷でいうわけにはいかんでしょう。だから鈴木さんの判断は正しいという方向でいわざるを得ないわけです。

そういうことで一番刑はばっさり死刑ですわ（笑）。それは覚悟はしておりましたけれども、そういう判決を現実にいわれますとね、人を殺したわけでもないけれども、手伝ったことは手伝ったんだなぁ、そうするとそれが死刑なのかねぇというようなことで、だいぶ悩みましたけれども。事件の本質はそういうことです。

事件の遠因

そもそも開戦後、オーシャンの占領までに八カ月以上もあったのに、なぜレプラ患者とか、あるいは無力な島民をフィジーその他に移住させなかったのか、いわゆる戦場に遺棄したまま、彼らだけは逃げたのかということです。なぜならば、農耕のきかない土地であり、雨はない、水の補給から考えなくてはいかん。日本の三宅島の十分の一

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

くらいの小島に、千数百名の生命を置いて白人だけ逃げるなんていうのは、とんでもない人道に反することであって、そのことが遠因となっているんです。

日本の軍隊がどうのこうのいいますけれども、やはり食糧の補給が十分につき、うまく行っている時はみんな人道的に戦っているんです。絶対こんなことでもって叩かれるようなことはしていません。ところが、補給しようという船を全部沈められまして、現地の捕虜収容所なりなんなりで、兵隊が食べる食糧がなければ、捕虜がいたって分けてやる気持にはなれないわけですね。大体が日本の軍人には捕虜イコール反逆者、憶病者との考えが徹底しておりましたから。

兵隊もやっぱり栄養失調で死んでいる、当然捕虜だって栄養失調で死ぬことがあり得るわけですからね。ところが戦後の裁きでは、捕虜は英雄であり、兵隊以上の待遇をすべきだったといわんばかりですからね。そういう形は随分おかしいと思うんです。

ナウル、オーシャンの場合も事情が許した時には、なけなしの船腹を回して、そして島民の生命を救ったわけですから、だからエリスの本にも書いてありますけれども、実際クサイ島かポナペ島、あっちに移された島民でフィジーのほうに戦後帰った人の中には向うで生れた子供を沢山つれて帰っている。そのうちにはオーシャン島の人間もいるけれども、それがオーシャン島に帰れないでなんか訴訟問題になっているようですけれども、そんなことはわれわれ関係ないことです。

いずれにしても戦争中に移住をさした島民が、その後子供も生んだりなんかして、フィジーに戦後戻っているということ、これはできればみんなそういうふうにやりたかったわけです。最後の島民だって、そういうふうにやりたかったわけです。そういうふうに鈴木さんは努力したわけです。それが出来なかったのです。

それからやっぱり戦犯の問題をガーガー連合軍が騒ぎたてたこと、それは自国民を慰撫する政治的な目的もあったかも知れませんけれども、必要以上にがなりたてたということ。それじゃ、鈴木さんはそういう情報をとったことも悪いじゃないかと、知らなきゃそんなことは影響なかったんじゃないかというけれども、それは一つの島の長ともあろうものが、情報をキャッチするということは非常に大事なことですからね。

だからぼくはその点、鈴木さんが短波を聞いて、それで連合国のメルボルン放送ですね、あれに攪乱されたのは鈴木さんが悪かったとは、ぼくは思わないわけで、大体そんなことを放送するほうが悪い。戦争裁判をやるならば、そういうことは無条件降伏のわく内で出来るのだから、事後立法で過去の軍の行動を徹底的に追求するということを戦勝の勢にのってさわぎすぎたこと、これが犠牲者を出す大きなもとになったんではないかと、そういうふうに私は思うわけでございます。

ひどかったオーストラリア軍

先程ちょっと触れましたが、ナウル、オーシャン部隊は、昭和二十年の十一月ぐらいにソロモンのマラリア瘴癘地にぶっ込まれて翌年の二十一年の二月ぐらいに復員していますから、わずか三カ月余りですね。この間にナウル、オーシャン部隊が、私は確か五割ぐらいはいかれたと思います。もう悲惨なものでした。

大体トロキナの収容所からソロモンのマサマサ島に連れて来られて、ジャングルにほうり込まれ、自分たちで木を切って、それで雨露を凌ぐコテージをつくれ、ハットをつくれといわれました。ろくな器具もないので仕事ははかどらん。野宿の一週間ぐらいは雨で濡れたりなんかして、そうすると、たちまちのうちに風邪を引いてしまうとか、あるいはわからなかったですけれども、マラリア蚊がいっぱいいまして、ようやくニッパ椰子で屋根を葺き終わって　床を張ってほっとしたぐらいから、バンバンとマラリア患者が出はじめたわけです。

薬さえあればマラリアなんてそんなに心配はないんですけれども、薬が補給されないから、発病しますと、もう一週間ぐらいしかもたないですね。栄養失調の体に、高熱。そうするとハットいっぱいに寝ている病人があちこちで末期の悲鳴を上げているわけですよ。

オーシャン島部隊の場合は、この前に一つタロキナの死の行進というのがありまして、オーシャン部隊六百名が、学会誌の写真に載っている降伏調印して、約四、五日かかってトロキナに連れて来られたわけですが、トロキナから収容所まで約十五キロばかりを炎天下、休みなしに歩かされたわけです。十五キロぐらい、ちょっとした荷物をしょって歩くのは、普通だったらなんでもないことです。

けれども、回りにまだ、オーストラリア軍の野戦のキャンプがございまして、そして海岸から収容所に向かって歩きだした途端から、まわりの豪兵が銃剣を持ってきて、非常にいやな言葉なんですが、「ファッカン・ブラディ・バースター」とか、「ブル・シット」って、日本語でいえば、クソヤローというような言葉とか、「ファッカン」というのも非常に悪い言葉ですよね、女性の。「ブラディ・バースター」というのは

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

父なし子というような意味。こういうような言葉を、わめきながら、銃剣で突つく。

そして、記念品が欲しいんですかね、肩章なんかをもぎとる、帽子の前章はとる。万年筆だとか時計なんかもちろんです。あんな哀れな醜悪な民族の姿というのは見たことないです。

要するに目の色を変えて、まず、物をとる。それからあとは殴る、蹴る、銃剣で突つく。六百名の部隊が、五十名ずつぐらいのグループに分けられ、数名の監視兵がついて行進しましたがね。ぼくは一番前にいたわけです。たまたま、アメリカ軍の二世の兵隊がいましてね、日本語ができる。なんで豪州軍の中にそういうのが混じっておったか、考えてみれば、日本語ができるし、部隊の中からいろんな話を聞く、諜報要員だったかも知れません。

オオツカという人でした、私はサンフランシスコ出身の二世だなんていっていましたけれどもね。そのオオツカ軍曹と一緒に一番前を歩いたわけです。だから私の場合、時計と肩章をもぎとられた程度で蹴とばされたり剣で突つかれたりはされませんでしたが、すぐ後ろからは全部やられました。

そこでは死者は最小限で済みました。それでも元気ないい兵隊だったですけれども、やっぱり四、五名は途中で倒れてそのまま息を引き取りました。熱射病かなんかでもって、道路にすっ倒れたのは数知れず。これは命だけは助かったものですから、あとでもってトラックかなんかで一括して運び込まれて、キャンプに戻って来ましたけれども。

降伏文書ではいいことをいっているんですよ。ちゃんと人道的に扱うとまではいっていませんけれども、捕虜としての待遇は与える。ただし、日本軍と友好的だった原住民は除いてというようなことが書いてありますが。

核兵器保有は国際法違反

ラバウルの軍事法廷では正義と人道の名において裁きますというんですが、これはトロキナのわれわれの経験、ソロモンのわれわれの経験、それから見れば、そういうことはいえない立場にあるとぼくは思うんです。

戦争は、なくて済ませるのが一番いいわけで、現に国際紛争を解決する手段として戦争に訴えないという不戦条約や国連憲章なんかもありますけれども、自衛戦争は許されている。国際法上決して不法でないといわれたりしていますけれども、まあ、戦争というのはやはり国と国のお互いの国民の命の取り合いですしね、交戦国の一方にとっては、どのような手段を使ってでも、相手の戦力を破砕して、それはいわゆる軍隊の戦力のみならず、銃後の戦力ですね、工場とか、そのほかの平和的な施設でも、戦力につながっているわけですから、それと相手国民の戦意の喪失。戦力の破壊と戦意の喪失、これを目指しているわけですから、だからそのためには手段を選ばないというのが戦争の実態だと思います。

それが戦争法規違反とかなんとかいいますけれどもね、結局、戦争に勝つために相手の戦力の破壊と戦意の喪失のためには手段を選ばないということで、一番いい例は原爆投下でしょう。原爆はこれはやっぱり従来の国際法、陸戦法規からも禁止されているわけです。というのは、無差別の大量殺戮、特別な苦痛を与える兵器、これは法規違反だというふうにうたわれているわけですから。毒ガスとか、ダムダム弾とか個別的に法規がありますけれどもね。だけども、核兵器だって、無差別大量殺戮の兵器で、しかもこれは本格的核戦争では地球自体おかしくなるといわれるしろものです。これはやはり戦争法規違反なんだというふうに解釈出来る。

しかしそれはアメリカではちゃんと政治的に理屈をつけていますね。要するに早く戦争を終わらせるためだったと。日本がもしそれを開発したら、それを使ったかも知れないじゃないかとか、アメリカがあれを使ったことは要するにちゃんと正義人道にかなっているんだというようないい方をしますけれどもね。しかし、あれを使ったということは、根本的には戦争法規違反の行為なんですよ。

しかもおかしなことに、東京裁判なり、それからBC級の裁判で、そういう具合にして、平和、あるいは人道というようなことを高々とうたい上げているにもかかわらず、現在、戦争法規違反の原爆や核兵器を旧連合国はみんな持っているわけですよね。ソ連にしても、アメリカにしても。

そこで開発競争をやって、これはバランスをとって、戦争抑止力になっているんだと政治的にはいいますけれども、しかし相手から攻撃を受けたら使いますよと。だから先に使ったほうは悪いけれども、逆に報復であとから使ったほうだって、いわゆる不法な兵器を使うわけです。要するに国内法でいう未遂といいますか、あるいは予備罪といいますかね、核兵器を開発して持っている国々は、みんな予備罪を犯しているわけですよ、国際法上。というふうな見方もできるわけです。

しかし、残念ながら日本のいまの国際法学者の中で、そこまでいう人は誰もいない。要するに、新聞なり雑誌なり、あるいは表に向かって、アメリカ、ソ連、イギリス、中国、フランス、インド、もういま国際法違反をすでにや

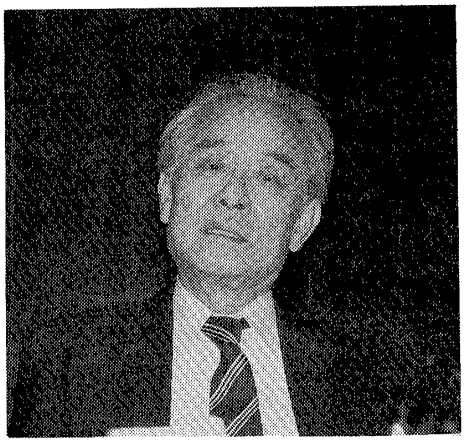
NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

っているじゃないですかと、核爆発の実験はもちろんのこと、兵器は全廃しなさい　そうなって初めて国際法違反の問題がなくなるわけだからというようないい方をしている人は誰もいないんですね。

これはやっぱり力が支配する国際関係の大きな波に流されているわけです。それで持っていない国だけを押さえている形になっているわけです。いわゆる核不拡散条約というのがありましてね。核を持っていない国々には非人道的兵器だから永久に持ってはいけないと。

こういう国際的な秩序は、第二次大戦後人道平和をうたい上げた立派な連合国のやり方からみまして、随分おかしいではないだろうかという議論も成り立つと思うんですが、これはまあ、そういうことをいうと、お前のは素人の議論であって、学者の議論ではない、国連憲章の中に依然として旧敵国條項があることや、日本は米国の核に守られていること、また戦後四十年余り世界の平和が保たれて来た事実を考えなさい、というふうに簡単に片づけられてしまうわけですけれども。



奈良　賀男 氏

二十八年から巣鴨に三年

そういうことで日本へ帰ってくるのは昭和二十八年の八月ですから、昭和十七年の八月に初めて戦地へ行きまして、帰ってくる間にちょうど十一年かかりました。それから帰ってきても、まだ豪州はお許しをくださらないんで、巣鴨拘置所に籍を三年間おきました。

ですけれども、その当時はすでに、何いっているんだ、日本政府が平和条約を締結して、昔からのやり方では、いわゆる戦時重罪というようなものがあったり、捕虜の問題があるけれども、平和条約を結んだらすべてを水に流すし解放するというのが、これが国際法の教科書でうたわれていた原則じゃないか、なんで平和条約のあと、抑留の継続をするのかと、とんでもない話だと、私どもが帰る前に巣鴨の人たちは騒いで、いわゆる職業補導という形で、政府の許可を得てみんな外に出ちゃっているわけですよ。

あそこはいわば寝に帰るだけぐらいにして、これまた非常にひどい話ですけれどもね。日本政府が平和条約で、吉田茂さんはじめ、戦犯の抑留は日本の政府の責任において継続すると、こういうことで、ちゃんと署名しているんだけれども、もう平和条約の発効が二十七年ですか、発効するとともに巣鴨の人たちはいうことをきかなくなっちゃっていたわけですね。

それで私どもは二十八年に帰ったもんですから、行ってみたら昼間は誰もいないんですよ。そんな状況でした。力が支配する国際関係というのはそんなものだということの一つの例として申し上げておきます。

マイト・イズ・ライトの国際関係、そしてそれに大きく影響される国際法なんか専攻して、情けない学問を専攻したもんだと（笑）、いろんな経験からずーっと感じているわけなんです。

随分、漫談みたいな話になって恐縮ですけれども、何かご質問でもあればお答えしたいと思います。

司会　きょうは本当に非常に貴重で、しかも感銘深いお話をしていただきまして、ありがとうございました。

これで今まで極めて断片的、あるいはアルバート・エリスの本からだけわかっていたことが、日本の歴史の中で、明快にきちっと解明されたと思います。そろそろ時間でございますが、せっかくでございますので、少し時間を延長していただいて、皆さんからご質問もあるかと思いますので、先生、よろしくお願いいたします。

西野さん、何かご質問ございませんか。

西野　あれを書いた時から思っていたことを、みんな明快におっしゃっていただいたので、特にご質問することもございません。

司会　そうですね、私の書いたことの中の間違いなんかも非常によくわかりましたし、西野さんも、日本海軍はオーシャン島を資源のある島として永久にとってしまうために、あそこの原住民を出したのではないかというようなことを、ちょっと書かれたけれども、そうじゃなくて、島民保護のために全部出すということだったということが、とてもわかりまして、非常にいい話だったと思います。

それから、オーシャンからトロキナに行く船の中も、相当ひどかったということを聞いたことがあります。それこそ寝場所もなくて、座っているだけだったとか、便所もなくて、そのまんまバケツかなんかでやれというようなことだったということですが。

奈良　その記憶は私はあんまりないんです。かなり大きな船でした。少なくともオーシャン島の部隊をトロキナに運ぶ、名前も出ていますね、この船はかなり大きくて　中で虐待されたり、

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

暴行されたりということは聞きませんですね。

そういえばちゃんと部屋があって、ベッドがあって、トイレ付きというのではもちろんなかったですね（笑）。

司会　トイレなんかも部屋に大きなバケツみたいなのがあって、そこでさせられたということはなかったのですか。

奈良　あるいはそういうことをさせられたかも知れません。しかし、そのぐらいのことは、とにかく船の中ですから、覚悟はしていましたけれども、トロキナについてからはびっくりしました。ぼくは昔、子供のころの話、鬼ガ島の鬼退治に赤鬼、青鬼が出てきたような感じでね、パンツ一つでもって真っ赤な日に焼けた兵隊だとか、人相の悪い黒いやつとか、回りから怒号を吐きながら　部隊にワーッと寄って来ましてね。要するに略奪暴行ですよ。あんな光景は、まさに鬼ガ島の鬼、大変なところに来ちゃったなという感じでしたね。

司会　結局、死刑になった方は鈴木さん以下、何人になるんでしょうか。

奈良　鈴木さんと、それから中隊四つですね、四中隊長、それに、これもおかしい話ですけれども、一つの中隊の三小隊長全部死刑です。ですから、全部で八人になります。

一中隊、二中隊、三中隊は、これも小隊長それぞれ三名づついますけれども、これは助かっているんですよ。同じことしかしてないんです。裁判のこのへんのところも、随分出鱈目だと思いますね。命を落とすか落とさないかは本人にとって大変な問題なんですよ。それで私ども騒ぎましたけれども、何事もないですね。その理由も本人たちはっきりわからないままですもんね。

オーシャン島は本当に戦犯らしい戦犯だったと思います、島民を裁判にかけるわけでもないし、全部が全部悪者じゃなかったわけですからね。それも部隊の行動に引っ掛けて、何をいわれるかわからんということなわけでしょう。そういう心配ですからね。やむを得ざるものがありましたけれども。

ラバウルの人たちの裁判というのは本当に気の毒でした。みんなインド兵補に引っ繰り返されて、あることないこと訴えられたわけですからね。現地の中国人とか、メラネシアンとかの問題はほとんどない。みんなインド兵補との問題です。それで叩いた、いや叩かないという話だけでしょう。それでも一つ叩いたら、さっきの話のように有期刑になっちゃうわけですからね。なかには全く無実のケースもいくつかあったようです。

正直だから、お前幾つ叩いたときかれたら、幾つ叩いたかわからんと（笑）。すると、これはもう二十年ですよ（笑）。

司会　一人生き残っているというのがわかったのは、トロキナに着いてからですか。

奈良　これは大分あとになってからです。たしかソロモンに収容されたあとでした。急に首実験を受けました。私のいった通りになっちゃった。鈴木さんに失敗したらえらいことになりますよと、意見具申していたわけだけども、ぼくのいうとおりになっちゃった。しかし、豪軍に全部引き渡していたらどうなったかも、これまたわかりませんね。ラバウルの例を見たり、生き残った島民の言をみましても、自分たちは銃をもらって訓練を受けたけど、実際戦闘になったら、日本軍を撃つつもりだったと、こういうことをいっているわけでしょう。だから、どうなったかわかりませんよ。みんな引っ繰り返って、あることないことといったかも知れません。

司会　糸永さん、何かご質問ありますか。

糸永新　私はたまたまこの裏っ返しのほうを研究しておったものですが、非常に参考になりました。米側がご承知のとおり、ナウルは落とそう、オーシャンは、向うの言葉でリダクション、制圧といったらいいんでしょうか。オーシャンはリダクションでいい、なぜならば飛行場もないし、奪取しても軍事的な価値がない。しかし、ナウルはやはり飛行場もあるから、これは落とさないと、交通戦の、シーレーンの関係でどうしてもナウルというのは単に飛行場だけじゃなくて、ソロモン、ニューギニア、それから中部太平洋、その要衝にあるということで、落とすつもりでおったわけです。ところが肝心な任に着いた攻略部隊の指揮官連中が猛反対しまして、それで途中でやめました。

奈良　そうですか、反対したのは大変利口だったですね。あそこは難攻不落ですよ。

糸永　反対の大きな理由はそれでございました。非常に地形が複雑で大変だと。ガダルで懲りておりますから。それで、これはやめよう、代わりにマキンということです。ですから、当初はナウルとタラワでしたんですね。この二つをそれぞれ一個師団でやる。ナウルはアメリカの陸軍の師団でという計画だったのです。

奈良　だからナウルは、相当きつい爆撃と、艦砲射撃を受けたようですよ。敵がマキン、タラワに行く直前の、いわゆる大空襲の時は。

リン鉱を掘った跡をご覧になった方がいるかもしれませんが、すごいんですね、岩盤が歯のように残って大変な

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

んですね。リン鉱をどんどん掘って行きますと、岩だけがノコギリの歯みたいに残っちゃうんです。だから、人の足を踏み入れることができないんです。

それにナウルもそうですし、オーシャンなんか特にそうですけれども、岸に砂地というのがあまりないんです。断崖で、非常にアプローチしにくい。それから陸上に入っても、鉱区は全然、人間も通れない。これは馬も犬も通れません。というのは、岩の塊がノコギリの歯のように残っている。ですから、奥地へ行く道路は決まっちゃっている。その道路さえ防禦すれば、中に来れないということになっちゃいます。

司会　私はナウルには行っているんですが、採掘跡というのは、大体ナウルと同じような感じですか。

奈良　大体、同じです。深さも。

司会　するとロタなんかとはだいぶ違いますね。

武村次郎　ロタの場合は、採掘跡は平面があって完全なポケット状なんですよね。ところがナウルの場合は平面というよりも、いわれるようにノコギリの歯のようになっているんです。やはりリン鉱の成熟度といいますか、古いですからそういうことになるんでしょうね。しかし、ロタでもそういうふうなところでして、人間がそこに適当な施設でもって、ポケット状のところにはまりこんだりなんかした場合に、攻撃するほうは非常にやりにくいという感じは受けました。ナウルも確かに攻撃するとなると大変なもんでしょう。

司会　平間さん、何かご質問なりコメントなりございませんか。

平間洋一　私は太平洋学会誌を読んでいて、きょうのお話を聞いて、なるほどやっぱりそうだろうと、納得できました。私は日本の海軍はそんなことはないだろうと思っていたんです。きょうのお話を伺いまして。ギリギリに切羽詰まったらそうなるのかなということと、自分が指揮官だったらどうしたかなということを考えますとね、本当に腹が痛いということで、軽々に批判もできませんし、本当にきつかっただろうなという気持でございますね。

司会　遠藤さん、なにかご質問はないですか。あるいはオーストラリアのために一言。この人は大変なオーストラリアファンで（笑）。

奈良　そうですか。いや、こういうお互いに苦い話は、過去の話として互いに反省し合い、現在の日豪の状態は理想的な状態ですから、私の学校にもオーストラリアから留学生が来ていますしね。本当の人間の姿は、ああいう闘争の姿ではなくて、やっぱり平和に暮らし合うというのが本当の姿じゃないかなと私は思うんですよ。

遠藤雅子　たまたまオーストラリアで十年ほど生活をしてまいりまして、向うの側に立って、あの人たちが日本人をどう見ていたかということを、まだまだ未熟ながら、少し勉強しておりますので、きょうのお話は大変、いろんな意味で勉強になりました。

奈良　まあ、戦前から白豪主義で、オーストラリアというのは、日本人には戦前からどうもやっぱり人種差別の国だとかいうことで、日本人はあまりオーストラリアにいい印象を持っていないし、それから戦中は特にシンガポール、マレーの戦闘でもって、オーストラリアの少ない人口の中から、貴重な壮丁が随分命を落としたり、ポートモレスビーの戦争やなんかで命を落としたりしていますんで、戦後はものすごく反日感情が、連合軍の中では一番ひどかったでしょうね。その気持はわかるんです。

遠藤　ですから、初めての戦争花嫁さんの第一号を入れるために、その申請がなされてから四年の年月を、その討議にかけているんですね。

奈良　ああ、中国地方に進駐しておったものの戦争花嫁の問題ね。

遠藤　そうです。最終的に六百人ぐらいの人が入国を許されているんですが。その第一号が許されるまでに、申請が出てから四年間。

奈良　昭和何年ぐらいに第一回が。

遠藤　二十七年です。二十七年に第一号が許可されているんです。豪州兵が中国地方に来ましたのが、昭和二十一年ですからね。

奈良　二十七年まで駄目だったのですか。

われわれラバウルの収容所、そのあとマヌスに移されましたけれども、収容所の監視兵、豪州兵の中で、二十四、五年くらいちなりますと、日本に進駐しておって帰って来た兵隊がいるんです。これはとても親日的になって帰って来ているんです（笑）。

それまではともかく、収容所の生活というのは、なぐる・蹴るは日常茶飯事で、労役は牛馬並み、処理中の爆弾がはねたり、大木の下敷きになったりで多数の死傷者が出ました。結核患者も出ました。

昭和二十一年から二十二年、三年、四年ぐらいまではずーっと大変でした。

ところが、二十四、五年ごろから、収容所の十人ぐらいの監視員の豪州兵の中で、三人ぐらい日本の経験をした人も混じるようになりましてね、そうすると、ほかの七人は昔と同じくものすごく、厳しくやるけど、こっちのほうは、何事も大目に見てくれるんです。お前達日本に帰えらん方がいい、大変だよ、こっちでのんびりやれやといっ

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

た調子でね。

ぼくが、びっくりしたのは、その後はなかったですけれども、日本から来た監視員が作業中に、お前ちょっと来いというんですよ、なんだと思ったらね、ビールを飲めというんですよ(笑)。これは、あの厳しい豪州の収容所規則からみれば大変な、反逆罪に当たるぐらいの罪です。

ぼくは遠慮して、いいといったんだけど、こいつがまた、四、五本も小さいビールビンをポケットに入れて歩きながら飲む、酒飲みなんですね。結局、好意に甘えて飲んだんですが、これがまたうまい(笑)。天下一品でしたね。あのうまいビールの味というのは、その後日本に帰ってきても、あんなうまいビールを飲んだことはないです。

森久男　四年ほど前、私はタラワに行ったことがあるんですけれども、キリバスの、確か、公共事業省の次官だと思うんですけれども、戦争中に日本軍がタラワ島民を全部殺す計画を持っていたと、こういうことを聞いたんですね。そんな計画があったんでしょうか。

奈良　ギルバート諸島を占領して、日本軍がそこに根拠地隊を作り戦略上の重要拠点にした。ですけれども、たくさん島がありますから、陣地を築いておるタラワとか、そういうところからは、島民をほかの小さな島に移せばいいんですから、それはもう内火艇でも運べる。環礁の中にたくさん島があるし、それから環礁の外にも島があるわけですから。だから殺すということはおそらく全く考えなかったと思いますね。

森　その時に聞いた話だと、男だけ殺して、女は生かしておいて、日本兵と一緒にして永久に占領しようとか(笑)。

奈良　それはそういう話ではないでしょうね(笑)。そういうことを真剣に考える軍の人たちがいたとしたら頭が狂っていると、考えるほかないと思いますがね。敵の中央突破の矢面と早い時期から見られていたところですからね。

森　タラワが玉砕した時は、タラワの原住民人口というのはどれぐらいだったんですか。

奈良　私はタラワのことはあまりよく知らないんです。しかし、タラワ本島にはほとんど原住民はいなかったんじゃないかと思います。

平間　記憶では、主陣地となった島には原住民はおりません。いまおっしゃられたタラワ本島というのは、おそらくベシオのことと思いますが、ベシオが主陣地ですから、同じ環礁の別のところに移住させておいたようです。

司会　どうもきょうは遅くまでありがとうございました。

本当に貴重なお話に感謝申し上げます。

新刊

海の果ての祖国

野村　進　著

七十四年前、密猟船に乗り込んだ一人の日本人が、北マリアナの小島に漂着する。その名は山口百次郎。後にサイパン島ガラパンに〝南方随一〟とうたわれた料亭「よか楼」の主人である。

一方は、やがて激しい戦禍に巻き込まれるサイパン・テニアン入植者の一典型と呼ぶにふさわしい、山口同様山形県人の石山正太郎。この両家族を中心として、その南洋での苦闘の足跡をたどりながら〝戦争と人間〟のテーマに取り組んだルポルタージュである。

戦争とか移民といった急速に風化しつつある素材をとらえ、あえて百五十人を超す証言、取材協力のもと、六年の歳月を費してまとめたという著者の使命感は、四百二十ページの行間を通して、よく感じとることができる。

特に、戦後のマリアナにもあった「勝ち組」「負け組」の争いで、テニアンで暗殺された「リベラルと名付けられた異端者」を自認する百次郎女婿の最後など、新しい史実の発掘もある。

家族とは？　日本人とは？　戦争とは？　アリアナ玉砕戦場の実態を、戦後世代の著者の眼を通して、如実に描き出している。

〈武村次郎〉

〔一九八七年七月　時事通信社刊　四二〇ページ　定価一八〇〇円〕

NII-Electronic Library Service